お前に英雄教えてやる

中宮　鈴羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お前に英雄教えてやる

【Ｎコード】
Ｎ２５３６Ｚ

【作者名】
中宮　鈴羽

【あらすじ】
どこにでもいる普通の青年『宇江田（うえだ）　龍青（りゅうせい）』は中学時代からハマっていたオンラインゲームを通じて学校一の美少女『赤星（あかほし）　優希（ゆうき）』と出会う事になる。
そんな彼女の夢はヒーローになること。
２人は夢掴むために動き出した。

0―プロローグ

俺の名前は『宇江田（うえだ）　龍青（りゅうせい）』。高２の１７歳。
強い男になって欲しいと願いつけられた名前らしい。
だが親の願いとは裏腹に俺はインドア生活一直線。今や完全に名前負けした人生を過ごしている。
容姿、運動、勉強、輝かしい学生生活を送るのに必須アイテムは全て並み。
器用貧乏といえるが、実際はどこにでもいる目立たない学生の一人に過ぎない。

・・・説明してて虚しくなってきたな

そんな感じで１７年間生きてきたが、ここで転機が起きた。
今まで帰宅部一筋の俺はなんと勧誘で部活に所属することになった。
入部先はなんと『倹約部』だ！

・・・何それ？

俺も思った（笑）
倹約部とは名の通りお金の倹約に関する技術を磨いていく部なのだ。
どうだ凄いだろ！
まさに取り柄のない地味な俺のポテンシャルが輝ける地味な場所だと思わないか！

・・・本編前から心が折れそうだ。

いやいや負けるな俺。
所属して良い事もあったんだ。

それは俺以外の唯一の部員であり、部の創設者であり部長である『赤星（あかほし）　優希（ゆうき）』。

彼女は同学年でトップ３に入る美少女だ。
明るく屈託のない彼女は男女問わず人気者だ。
父親が空手道場の師範を務める彼女は運動神経は抜群によく、１年生の体育祭は注目の的だった。
体育祭後は運動部の先輩達から勧誘を受ける事になるが、全て道場通いを理由に部活動には参加しなかった。
彼女には夢があったからだ。
そんな彼女が夢を掴むために作った『倹約部』。
そして彼女に誘われ入部した俺。
平凡ながらも平和に過ごしてきた俺の人生はここから大きく変わっていく。

1 - 誓い

俺は『宇江田　龍青』。
高校２年に進級して１ヶ月経つ。
そろそろクラスメイトも気の合う仲間を見つけ始める頃だ。
類は友を呼ぶという言葉があるように大抵は似た者どうしがグループを組むのが普通だろう。
『勉強』『スポーツ』『お洒落』『ゲーム』『音楽』
内容は様々だ。
そんな中で俺が属したグループは何かというと。
『地味』
多分、いや絶対これで間違いない。
俺と一緒につるんでいる佐藤君と田中君の長所を上げろと言われたら。

・・・くそぅ。１時間考えても答えられない気がする。

でもいい奴なんだぞ。
知り合って一ヶ月だからな。
すまん２人とも今はそれしか言えない。いつか見つけてやるからな！

でも俺の長所を言ってくれって聞いたら２人も同じだろう。
俺は何やらせても良くて中の上といった所だからな。
だからお互い様さ！

けど長所じゃないが趣味といえるものは持っている。
オンラインＲＰＧ。
早い話ＭＭＯＲＰＧだ。
２Ｄの単調なグラフィックだけど豊富な職業と簡単そうに見えて奥

が深いのが人気で日本では多くのプレイヤーが遊んでいる。
これだけは中学生の頃から初めて今じゃトップランカーの仲間入りを果たしている俺はここでは結構な有名人だ。
ふふふ、『有名人』いい響きじゃないか。
そんな訳で今日も俺は学校が終わると寄り道なしで真っすぐ家に帰宅してパソコンの電源を入れた。

帰宅後早々にゲームを始めた俺は一緒に冒険へと旅立つ仲間を探すため知り合いがログインしているか確認する。
知らない人と冒険する事もよくあるが、やはりある程度気心が知れた人達と遊ぶ方がやりやすい。
「やっぱり皆ログインしてないか」
学校から自宅まで俺は自転車で２０分程で通える距離に住んでいる。
中学卒業時に親の仕事で引っ越した俺は知らない土地で１時間以上もかかる通学はしたくなかったので、自分の学力で入れる一番近場の学校に入学することにした。
勿論このゲームをより長くやるためだ。
けどやはり平日の３時、４時にログインしている奴は少ない。
だからこの時間帯は知らない人と適当に組んで遊ぶか、一人でいるケースが大体だ。
今日は行きたい場所はなく、一人で時間を潰そうと考えているとログイン者リストに一人の名前が点灯した。
『Ｒｅｄ　Ｓｔａｒ』
呼び名は『Ｒｅｄ　Ｓｔａｒ』のＲとＳを取って簡略した『アース』と呼んでいる。
拳一つで戦う格闘家の『Ｒｅｄ　Ｓｔａｒ』が使うキャラクターは短パンに臍が完全に見える短いシャツを着た露出度の高い女性だ。

ちなみに俺は魔法使い。装備は緑で統一された三角帽子にローブ。
一般的なイメージに近い魔法使いのキャラクターだと思う。
性別は男だ。

『Ｒｅｄ　Ｓｔａｒ』と知り合ったのは１年程前。
一人で冒険に出かけていた時だった。
森の中でモンスターを狩っていると俺は突然４人のプレイヤーに囲まれた。
『ＰＫ』というやつだろう。
ここではプレイヤーがプレイヤーを倒すとアイテムを強制的に奪う事ができるのだ。
勿論モンスターからもアイテムを獲得する事はできるが、なかなか良いアイテムはでないものだ。
ならばと良いアイテムを持っているプレイヤーを狩る行為に走る。
これが『ＰＫ』だ。
まあ現実世界でいえばカツアゲといった所だろうか？

むぅ。流石の俺も現実世界ではカツアゲに遭った事はないのだが。

今にも襲いかかって来そうな相手に苦笑する。
４人は自分よりＬｖが低いと思われるが別に余裕がある訳ではない。
負けを悟ったのだ。
魔法使いの長所は１にも２にも魔法である。それしかないと言った方がよいだろう。
だが魔法の種類は豊富で、会得している魔法によって様々な戦略を立てる事が可能なゲームだが、今みたいな状況下に置いては自分を守ってくれる壁役が必要不可欠なのだ。
なにせ防御とＨＰが極端に低い職業だから、火力の高い相手に懐を許した瞬間決着がついてしまう。
格下の相手だから魔法を一撃喰らわせてやれば倒せるかもしれない

が、連続して魔法は撃てない。
一人倒した所で残った3人が俺を倒すだろう。
交渉して被害を軽減する手段もあったが俺はしなかった。
こんな相手に下手にでる事を嫌った。トップランカーの最後の意地というやつだ。
襲いかかってきた相手の一人に魔法を一撃喰らせ倒してやった。
次は自分だろう。勝てない戦いだったが一矢は報いたのだから満足はしていた。
そう思いながら最後の抵抗で逃げ回るが、流石に3人相手に振り切るのは難しい。
一人のプレイヤーに捕まり終わったと思った瞬間、颯爽と新手が草むらの影から飛び出し自分と敵の間に割って入ると躊躇いなく殴りつけた。
豪快に吹き飛んだ『ＰＫ』の一人は一撃で倒され消えていく。
スタート地点に戻ったのだろう。

『大丈夫か？』

俺も『ＰＫ』達も突然の出来事に唖然としている中、格闘家の彼女はチャットで俺に語りかけた。
慌てて返信する。

『無事です。ありがとうございます』
『ならば、２人は私が引きつける。その間に君は魔法で倒してくれ』
『了解』

簡単な打ち合わせの上に、相手にも作戦が知れてしまうが気にしない。
『ＰＫ』を一撃で倒した彼女は恐らく上位ランカーの一人だろう。
格下２人相手に作戦がバレた所で焼け石に水なのだ。

形勢不利と判断した2人は撤退を試みるが彼女の方が速さも上手さも上だった。
逃げ道を塞ぎ、2対1で戦い始める。

『君に売られた喧嘩だ。君の手で決着をつけるといい』

戦闘中の彼女から余裕のメッセージが届く。
あくまで足止めをするだけで倒す気はないらしい。
俺は礼を述べ2人を片付けた。

『私はヒーローを目指しているからな。困っている者がいたら無条件で助けるのは当然だ』

戦闘が終わり改めて礼を述べた時に言われた一言だ。
己の肉体一つで戦う英雄も珍しい気がしたが相手は恩人だ。何も言わないでおいた。
ついでに言うと女性なのでヒロインである。
彼女は一人で狩りをしていたらしく、俺も暫くこの辺りで狩りをする予定だったので流れでパーティーを組むことになった。
モンスターは左程強くないのでチャットをしながら戦闘を行っていた。
主にゲーム経歴や、現実世界の簡単なプロフィールなどだ。
相手はゲーム創設時から始めている古参プレイヤーだった。
といっても開始されたのは5年前からで、中学1年生から始めた俺とは1年しか違わない。
年齢はなんと同年代だ。
初対面の人に年齢を聞くのは躊躇われたが、音楽がテレビの趣向が若者向けの物ばかりだったので思い切って聞いてみた。

けど性別は流石に聞かなかった。
このゲームに関わらず、ゲーム人口はやはり男性の方が多い。
女性と聞いて眼の色を変え、積極的・・・もとい暴走気味にお近づきになろうとするプレイヤーもいるので基本的に聞かないようにしている。
このキャラクターみたくスレンダーで可愛い子だったら嬉しいんだけどなぁ。

・・・男性だった時を考えてこれ以上は妄想するのやめよ。ショックが大きそうだ。

キャラクターの性別によって変わるイベントもあるので、全てのクエスト（依頼）、イベントを見たい人は異性のキャラクターを使うのだ。
そんな訳で彼女と知り合うことができた。
接近戦主体の格闘家と遠距離主体の魔法使いのバランスの良さもあり、同年代という事もあって最近では一番よくパーティーを組んでいる。

『やあ流星。ちゃんと世界の平和を守っていたか？』
『いや、今来たばかりで何もしていないよ』

個人用のチャットで『Ｒｅｄ　Ｓｔａｒ』が呼びかけてきた。
ちなみに『流星』は俺のキャラクターの名前だ。
単純に青龍を流星に変えただけだ。
彼女は特撮ヒーロー好きで会うといつも世界平和の為に尽力したか訊ねてくる。
一種の挨拶みたいなものだ。
そして今日も彼女と世界平和を願ってモンスター退治に出かけて行

った。

結局夕飯の時間まで2人で狩りをしていた。
戦果は大漁だ。
左程難易度の高くない場所だったのでトップランカー2人いれば当然の結果といえる。
人気のない湖の畔で獲得したアイテムの山分けする。
休息の意も込めてキャラクターを座らせた。

『今回も上々のデキだったな』
『流星とは相性が良いみたいだからな。今日も多くの悪人を成敗してやったぞ』

彼女の頭上に沢山の音符マークが咲きでている。上機嫌なご様子だ。
敵はモンスターばかりではなく、某アニメキャラクター出てくるの敵などもいる。
そういうのは大抵人型の敵なので、彼女は悪人と称し優先的に倒しに向う。
山分けが終わり、まだ時間があったので世間話を始めた。
相手は同世代であるが、何といっても俺は『地味』に分類される程の人物だ。
お洒落やデートスポットみたいな話には全く自信がない。
内心いつこのお題が上がってしまうのかビクビクしながらも楽しいお喋りをする。
今日の話題は進路に関してだった。
うん。高校2年生らしい話題でなによりだ。
要約すると彼女の父親は大学には行かずに実家の手伝いをして欲しいらしく、彼女はそれに難色を示しているみたいだ。

『別に実家を継ぐのが嫌いなわけじゃないんだ』

なら何が嫌なのだろうか？
ネット越しで直に対面してはいないが、相手は俺の気持ちを察してくれたらしい。
続きを語り始めた。

『流星。私はヒーローになりたいんだ』

この予想の斜め上の台詞に俺の思考は一時停止していた。
ヒーロー好きなのは知っていたがここまでとは・・・
特撮ヒーローが架空の存在なんて事は小学生でも知っている。
けど相手の表情は分からないが真剣に言ってる気がする。

『いいんじゃないか』

何て答えてよいか分からないとはいえ、他人事な返答に自己嫌悪に陥りそうだ。
顔が引き攣っているのが分かる。実際に相対していたら嘘だとすぐにばれただろう。

『本当か！！』

俺の前向きな返答にキャラクターの周囲にキラキラと星が輝いている。
良心が痛む・・・。

俺の気持ちとは裏腹に勢いづいた彼女は立ち上がり、夕日に向かってビシッと指をさす。

『ならば流星。私はヒーローを目指す。手伝ってくれるか？』

いい加減に生きている俺と違い、ずれてはいるが真っすぐに生きる彼女を羨ましく思った。

嘆息して、俺もキャラクターを立ち上がらせ夕日に向かって指をさす。

『いいぜ』

その時の彼女がどれ程の気持ちで公言したのか知るすべも無く、ただその場のノリで安請け合いをしてしまった。

次の日。

昨日のやり取りは忘れて普段通り『地味』の称号を携えた仲間と平凡な学校生活を送っていた。

昼休みの鐘が鳴り、席が隣同士の佐藤君と田中君のもとへ向い弁当の準備をしていると2人はポカンとこちらを見つめる。

怪訝に思いながら「どうした」と声をかけると2人の視線は俺の上に向く。

頭上を手で確認。何もないので背後かと思い振り向くと『地味』とはまるで無縁の美少女がこちらを見つめて立っていた。

彼女は目を輝かせて言った。

「青龍。約束通り、今日から私達はヒーローを目指すぞ」

・・・・・・・は？

訳が分からなかったが、目の前で満面の笑みを浮かべる美少女はとても魅力的だった。

2 - 出会い

茫然としているのは俺だけじゃなかった。

「名前で呼んでる」

「どうゆう仲なんだ」

クラスにいた人達はひそひそとこちらを注目しながら話している。当たり前だろう。『地味』の二つ名を持つ俺には似つかわしくないほどの美少女が親しげ名前を呼んでいるのだ。

とはいえ何の用だろうか。見当もつかない。

いやそれ以前に

「どちら様でしょうか？」

名前すら知らないのだ。どっかで不快な思いでもさせたのだろうか？嫌らしい視線で見てたとか。あり得る。

足――細い！

腰――細い！

胸は・・・今後に期待！

顔――可愛い！

うん。この線が有力だ！・・・・ヤバいどしよ。

俺の返事に彼女は一瞬不満気な表情を見せた気がしたが、すぐに人懐っこい笑みに変えて挨拶する。

「すまない。自己紹介がまだだったな。私はＡ組の赤星　優希だ」

意味ありげな顔をする彼女だが、理解できずにいるとそっと俺のそばに顔を近づける。
思わず鼓動が高鳴ったが、彼女は無視して小声で一言付け加えた。

「英語読み」

英語読み？
何をって多分名前だよな。それしか教えてもらってない。

赤星、赤星、赤・・・Ｒｅｄ？

・・・え？

「アース？」

俺の疑問交じりの呟きに納得した表情を浮かべる。

「では行こうか青龍」
「どこに行くん・・ですか・・・赤星さん」

突然の事に思わずタメ口を使うところだったが、初対面しかも女性相手なので敬語に直す。

「職員室。そのまま私も食事にするから弁当は持ってくるといい」

要件を伝え終えた赤星は踵を返そうした所で、ピタッと止まり再度こちらを向いた。

「私のことは赤星ではなく優希と呼ぶように。あと普段通りの話し

方で構わないよ。先に行って待ってる」
今度こそ赤星・・・優希は踵を返し、職員室へ向かって行った。
皆の視線が痛い。
男女問わず何か言いたげな顔で見ている。
「赤星さんと知り合いだったのか？」
『地味友』の佐藤君が気を使ってくれたのか小声で質問する。
俺は首を横に振った。
「知らない。初めて会った」
実際は知っているが、直に会うのは初めてだったのでそう言った。
「佐藤は彼女の事知ってるのか？」
「知ってるもなにも」
呆れた表情でこっちを見る。
そんな有名人なん？
「2年A組。赤星　優希さん。男子アンケートでは毎回確実に3位内に入る人気者だ。けど彼女は男女問わず人気があるから、多分学内全員で投票したら1位は間違いないぜ」
男子アンケート。そんなのあったのか。
佐藤め何気に流行の波にのってるな。俺と同じカテゴリーのくせに。
「勉強もできるんだけど、特に運動神経が抜群なんだ。実家が道場で中学生の時、空手、柔道、剣道のＪｒチャンピオンになってるし、

去年の体育祭じゃあ陸上部の先輩相手に完勝もしてる。なのに性格もいいんだ。困っている人がいたら迷わず手を差し伸べてくれんだ」

「佐藤お前・・・」

あまりに熱のこもった説明に顔が引き攣る。

去年佐藤は同じクラスだったらしく、その時に彼女が手を差し伸べてくれたらしい。

彼女からすればヒーロー道を則ったって所だろうが、佐藤はそれ以来ずっと慕っているみたいだ。

あんな可愛い子にそんなことされたらそりゃあ落ちるよな。

告白までは至ってないようだが、まあ学校のアイドル相手に告白できるなら俺達と一緒にはいないよな。

それはさておき、彼女が『アース』だったとはなあ。

突然すぎて今一つピンとこないが、本人がそう言ってるんだしそうなのだろう。

そしてあの時語った夢は本気なんだろう。実際に行動に移すくらいだ。

学校一の人気者ってことだけど、皆彼女の夢は知らないんだろうな。

知ったらどんな反応を示すんだろう。案外あっさりと受け入れられたりして。

既にある意味ヒーローみたいなもんだからな。

それはさておき、そんな彼女は俺に何を手伝ってほしいと言うんだ？

寧ろ手伝うことなんてあるのかよ・・・

「行くのか？」

こっちは案外冷静だな。

驚いてはいたようだが、広げたばかりの弁当を片付けるのを見て質問してきた。

「あの場で断れなかったし、行くだけ行ってみるよ」

どのみち周囲の視線で食事など集中できそうにない。

さっさと職員室へ向かってしまおうと考えていた。

3 一部の設立

俺は今、体育館外れの物置部屋にいる。
元々は運動用具を保管する部屋だったが、体育館の改装で広い用具置き場が館内に作られてから全く使用されていない。
床は剥がれ、電灯は所々壊れている。
そんな壊滅的な部屋だが不衛生ではない。
四方にある窓を全開にして明かりは十分に行き届き、埃もない。
保管されていた錆びついて使用できない備品は隅っこに纏められ十分な広さを確保できている。

ここで俺は母親に作ってもらった弁当を食している。
そして向かいには学校一のアイドル（『地味友』佐藤調べ）、赤星優希が共に持参したお弁当を食べている。

「すぐにでも活動を開始したい所だが致し方ない。まずはあの錆びれた用具を片付けてからだな」
「・・・おお」

目を輝かせ希望に満ちた表情で今後の計画を話す優希に気圧され気味だ。
何せ彼女が一刻も早くと願う活動とはヒーローになるための活動なのだから。
なにが彼女を突き動かしているんだろう。

この物置部屋は顧問の先生に掛け合って部室として使わせてもらう事になった。
部員は俺と部長の優希だけだ。

とはいえ俺は入部して初日。
未だ活動が分かっていないので、不安が募る一方だ。

いや、それ以前に・・・
この『倹約部』でいったい何をするんだ？

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

物置・・・もとい部室に行く前の事だ。
優希さんの指示通り俺は職員室へ向かう。

「失礼します」

ノックして職員室に入り、軽く周囲を見回すと優希さんが気付き手招きをしている。
近づくと優希さんの隣で座っている女性を見つける。
確か、白菊先生だ。

名の通りの白い肌。
腰まで届く長い黒髪。
温和そうな笑みが特徴的な家庭科の先生だ。
俺が受けている家庭科は白菊先生ではなく、５０代のオバちゃんだ。
失礼ながら白菊先生が良かったな。

そんな風に思いながら2人のもとへ近づき、軽くお辞儀して挨拶した。
挨拶が終えると優希さんは先生といた理由を話す。
「白菊先生は我が部の顧問になる。くれぐれも粗相のないように」
「良かったわね赤星さん。これでやっと部を立ち上げられるわね」
「はい。これも先生のおかげです」
姉妹のようにハシャグ2人に俺は状況を整理するのでやっとだった。
「こ、顧問ってどうゆうことですか？」
俺の質問に2人ハシャグのを止め、先生は目を丸くして聞いてきた。
「宇江田君。赤星さんの作る部に入るんじゃないの？」
不思議そうに尋ねる先生をよそに優希さんは一枚の紙を俺に手渡す。
入部届けだ。再確認。
・・・うん。入部届けだ。
強引すぎるだろ。
渡された入部届を睨むように無言で凝視していると、ふと優希さんと目が合う。
俺の気持ちが伝わったのか不安そうだ。
「手伝ってくれるじゃなかったの？」
『上目使い』　&　初の『女言葉』を頂きました♪
確かに手伝うと言ったが色々と卑怯すぎるだろ。

隣で先生が、女の子泣かしたみたいな顔で憐れんでるし。
俺は嘆息して一言。

「入部させて頂きます」

その瞬間、有希さんの表情が明るくなる。

「ありがとう」

手をギュッと握りしめられ笑顔を見せる。
学校一アイドルと称される意味が分かった気がする。
佐藤さっきは白い目で見てすまん。

って何か忘れてるような・・・あ！

「そうだよ。俺、何の部活に入ることになったんだ」

言った後に思ったが相当間抜けな台詞だよな。
先生は優希さんを見やる。

「もう決まってるの？」
「いくつかは考えてきました。龍青なにか良い部名はあるか？」
「赤星さん。何で俺に振るんですか？」
「部長として部員の意見も尊重してやらないといけないからな。あと優希だ」

部長。そんな所で優しさいらないよ。
つうか何でこれから部活やるのに名前が決まってないんだよ。

活動目的決めて、目的に沿った部名決めて、部を創設するじゃないのか？

「お任せします」

「分かった」

やけくそ気味に丸投げしたが、気分を害した様子もみせず優希さんは思案する。

いくつか考えてきた言っていたので、どれにするか選んでいるのだろう。

「じゃあ『倹約部』でお願いします」

何だ『倹約部』って、いや最早なにも言うまい。

これで良いかと無言で問う優希さんに頷き、先生は。

「なかなか良さそうな部ね」

本当ですか？

怪しむ俺だが、先生は本当にそう思っているようだ。

満足そうに頷いている。

優希さんは先生と手続きを行った。

「よし終わったぞ」

「良い部活になることを祈ってるわ」

優しく微笑む先生。

「では、手続きも終わった事だし部室に行こうか」
「優希さんもう部室決まってるんですか」
「ああ、まだ片付いていないが一応部室としては使えるぞ」
増々もって順序逆だ・・・
何と言っていいのか分からない俺に優希さんは少し睨み
「優希だ」
『地味』男の俺に名前を呼び捨てなんてハードル高すぎるだろう。
じっと見つめて動かない彼女に大きく深呼吸して
「じゃあ、部室に行ってみよう。優希」
「では行こうか」
見惚れるほどの笑顔で頷く優希の姿は暫く脳裏から消えない気がする。

４ー部室にて

人生初、親類以外の異性と２人きりで昼食を過ごした俺だったが、２人きりならではの甘く、浮いた話など一切なかった。
オンラインゲームで知り合って大体２年経つが、その時と同じ性格だったとしたら、そういう話はしないだろう。
実際出会ってみて結構言動が男っぽいからな。
悲しいが『男子力』Ｌｖ１以下でスラ〇ムも倒せないような村人Ａ程度の俺にとっては有難い話だ。
『地味力』ならきっとム〇ーも一撃だがな。

向かいで食事している優希の弁当を見る。
女の子らしいお弁当だと思いきや、箱の色は赤だが特に飾り気もなく男子と同じくらい大きめのサイズだった。
中身もお米とおかずの比率が６：４くらいか。
そんな感想を抱いていると頬をほんのり赤く染めた優希がこちらを見ていた。
俺が何を言いたいのか悟ったようで弁明する。

「し、仕方ないだろう。私の実家は道場で、住み込みの門下生には学生もいるんだ」

慌てるように早口で話す。
用は住み込みの門下生さんに作った弁当と同じ物を持ってきているらしい。

「へぇー。偉いな」
「そ、そうか」

安堵の中にちょっとした自慢を覗かせる。
女子の学校生活にとってお弁当は一つのステータスみたいなものだと認識している。
このお弁当可愛いねとか、彩が綺麗だとか、そんな感じか？
そんな男っぽい弁当、嫌な女子はハッキリと嫌と言う。
俺の妹はそうだった。
母親がお弁当を作る時間がなく俺のお弁当と同じ感じの内容になったら、駄々こねて泣いていた。
そして俺も泣きそうだった。
そんなに嫌か兄の弁当・・・
それを考えれば優希の行動は立派だと思った。

「一番早く出ていく人が7時前だからな。毎日支度するのが大変なんだ」
「優希が作っているのか！？」
「ああ、母親は既に他界しているからな――気にしなくていい。私が物心つく前の話だしな。親不孝者と言われるかもしれないが、家に帰ったら門下生の人も多くていつも賑やかで気を使ってくれたから寂しいと思った事はないんだ」

不味いこと言ったと思う俺に明るく話してくれる。

「それに母親変わりってわけじゃないが麗子さんもいるからな」
「麗子さん？」
「白菊先生だ。母方の親戚なんだ」

驚く俺。それであんなに仲よかったんだな。
職員室では随分親しげに話していたからな。
こんな意味不明な部に協力してくれるのも納得だ。

すると先生は
「先生は優希の夢を知ってるのか？」
「知ってる。でなければこんな馬鹿げた部を認めてくれないだろう」
最もだ。というより馬鹿げた部だと理解してたんだな。少し安心した。
けど、そしてら単純に英雄部とかでも良かったんじゃないか？
疑問を投げると優希は呆れたように見やる。
「どこの世に正体をばらすヒーローがいるんだ。ヒーローは絶えず弱者を影ながら見守り、悪人を成敗していくものなのだ」
「もしかして『倹約部』なんて部名にしたのは」
「勿論カムフラージュだ」
だから部名に拘りがなかったんだな。
「ついでに言うと、人が寄り付かなそうな部名が好ましかった。そういう意味では『倹約部』なかなかの力作だと思うぞ」
パッと見た感じこんな部に入ろうなんて思わないよな。
「それでも、入部希望者が来た場合どうするんだ？」
可能性が０ではないので一応確認してみた。
優希は肩を竦める。
こんな部に入るとは思えないと言いたげだ。
部長としてそれはどうだろう。
「とりあえずは表向き『倹約部』として活動する。そして面白みの

なさ最大限にアピールして退部してもらおう」
酷い話だが、面白みのない部としては同感だった。
「当面の活動は先程言った通り部室の片付けからだな。それが終わったら『倹約部』に必要な用具を最低限購入。それが終わったらやっと活動開始だな。あと部員は素質のありそうな人がいれば勧誘だな」
「この部に必要な素質って」
「無論。ヒーローになれそうな人だ」
・・・俺該当してなくない。
もしかして部員集まったら俺必要なくなったりして。
「今後の予定はそんな感じでいく。質問はあるか？」
「じゃあ一つだけ」
優希は無言で促す。
「何で俺が『流星』だって分かったんだ？」
慌ただしすぎて忘れていたが、昼食中に頭の中を整理してた時に気付いた。
俺の疑問に優希は淀みなく答える。
「クラスメイトの佐藤君とゲームの話をしていただろう」
「・・・そういえばした事あるな」
2年になって間もない頃だ。

佐藤と知り合ってゲーム仲間を増やそうと話題にした事があった。
じゃあ優希はその頃から知ってたのか。

そうとは知らず、チャットで色々と話してしまった気がする。
自分の過去とか、友達とか・・・・好きなタレントも言った気がする。
赤面したのが分かった。
それを見た優希は悪戯な笑みを作り

「これからピンクのリボン付けて登校してきてやろうか？」
「結構です！」

思わず声を荒げてしまったが、優希は楽しそうに笑っている。
ちなみにピンクのリボンは俺の好きなタレントがいつもしているトレードマークだ。

くそう完全にばれてる。
そして確信犯だ。

ここ数ヶ月で話した内容を必死に洗い出していると優希は立ち上がった。

「もう昼休みが終わる頃だ。もう質問はないな」
「そんな時間か。大丈夫だ」

早かったな。のんびりしている暇すらなかった。

「では最後に、いつかは発覚するだろうが、当面は部を立ち上げた事は秘密にしておこう」
「何でだ？」

別にばれても構わないよう『倹約部』を立ち上げたのだから隠す必要ないんじゃないかと思うが。
優希は困ったような難しい顔で躊躇いがちに「麗子さんが言ったんだと」と強く念を押す。

「自分で言うのも何だが私は結構な美少女だそうだ――憐れむ顔でこっちみるな！」
「だってなあ」

否定はしない・・・いや肯定すべき内容だが、さすがに本人の口から聞くと少し引くわ。
優希は俺の視線を振り払い話を続ける。

「故に部の宣伝をしたら、部の活動内容に関わらず募集してくる人が増える可能性が高いそうだ！」

半ばやけくそ気味に怒鳴って説明する。
確かに優希目当てに入部してくる可能性も高い。
そうなると自然と彼女の夢も遠のく。

「ん。分かった」
「よろしい！」

優希は誤魔化すように強引に話を切った。

「じゃあ今日会った事は何て説明する」
「ゲームで同じ学校の人だと分かったから声かけてみた程度でいいんじゃないか？」
「了解。それでいこう」

嘘はついてないし問題ないだろう。

「では龍青。これを渡す」

一枚の青いバッジを手渡された。

「これは」

「正式な『倹約部』に渡そうと考えていたバッジだ」

冒頭部分を強調して言った優希は自分専用の赤いバッジを見せる。

「この真ん中に描かれたロボットは？」

「私が設計した合体ロボだ。強いんだぞ」

シャドーボクシングみたくパンチを繰り出し、クオリティの高いロボットの絵に満足そうに自慢する。

ヒーロー目指すってそういう方向性なのか・・・

「どうした龍青。疲れてそうに見えるぞ。まだ我が部は始まったばかりなんだ。そんな情けない恰好を見せていたら夢は叶わないぞ」

「そうだな」

元気一杯の優希に相槌するのがやっとだった。

5 ― 凡才

昼休み終了の鐘が鳴ると同時に俺は教室に入った。
理由は簡単だ。
優希との関係を聞かれるのが煩わしかった。
特に佐藤は優希に気があるみたいだからな。
こちらとしても気を落ち着かせたいので誰とも話さず午後の授業を受けた。
何人かの男子生徒がこちらをちらちら見ていた気がしたが勿論無視した。
大人しく授業を受ける俺の成績は悪くもなく良くもなく、普通ってやつだ。
天は二物をを与えずというが、俺は一物も与えられていない気がするが気のせいか？
中学の頃はテストの成績で順位が発表されるので、一時期必至に頑張った記憶があるが結局1位の奴を抜くことができなかった。
しかもそいつは彼女持ちで、テスト期間中も遊んでいるような奴に負けたのだ。
世知辛れぇ。

運動もそうだ。
俺は小学生の6年間ずっと地元の少年野球クラブに所属していた。
6年生の時にレギュラーを勝ち取りサードで3番だった。
あの時は嬉しかったなぁ・・・
けど長く続かなかった。
夏休み期間中に一人の少年が引っ越してきた。
彼は他の強豪チームで4年生からレギュラーをしていたらしい。
そんな彼の守るポジションは俺と同じサード。
サードは一つしかないポジションだからレギュラーは2人のどちら

か。
夏休み中俺は毎日素振りして、監督にノックしてもらった。
当時では一番の頑張りを見せたと思う。
監督も俺の頑張りを褒めてくれ自信に満ちていた。
そして夏休みが終わり初の対外試合。
俺のポジションはベンチだった・・・
努力する事は必要だろうが、結局は才能がものをいうのだと俺はこの時認識した瞬間であった。
世知辛れぇ。

中学で勉強で負けて以来、努力することを止めた。
夢を持つことも止めた。
変哲もないただの一般人でいいと思った。

嫌な過去を思い出した俺は大きく嘆息し、授業中だが机に突っ伏した。
俺に才能ってあるのだろうか？

――この部に必要な素質って
――無論。ヒーローになれそうな人だ

部室で会話した内容を思い出す。
優希は俺の持ち得なかった運動も勉強もこなせるらしい。
男だったら一生口聞きたくない相手だな。
けどそんな彼女の夢はヒーローになることだ。
今時子供でも言わないだろう。しかも少年みたく目を輝かせて。

授業中だが机に突っ伏したまま俺は苦笑する。

青春真っ只中、早々に夢を諦めた俺は『何か』に変われるのだろうか？

さすがに職業ヒーローとは大っぴらに公言したくないが、夢を持つ彼女が羨ましく思えたのは確かだ。

流されるままに入部してしまった『倹約部』。

もう一度、もう一度だけ、あの時失った俺の思いを蘇らせてみたいと思う俺がいた。

6 ― 腕相撲

本日の授業が終わりホームルームを待っていると、やはりと言うべきなのかお昼の出来事について詮索してくるクラスメイト。
照れながらも自称モテる（実際は白菊先生の見立て）と言い切った優希だが嘘ではなかったと証明される。
佐藤はともかく普段話すらしていない奴も近寄ってくるのには少々イラッときた。
変に慣れ慣れしく話かけてくるが「何でお前何かが優希さんと」言いたげで見下されている感じがした。

無視してやりたい衝動に駆られたが、ここは優希と打ち合わせ通り「ゲームで知り合った」と主張した。
何のゲームか教え欲しいと言う奴もいたので教えてやる。
だがトップランカーの彼女が昨日今日始めた初心者が肩を並べるわけもない。
きっと並んだ頃には卒業だ。それ位の時間は必要だろう。

初めはゲームをネタにお近づきになろうとする輩も考えたのだが一笑された。

「下心で近づく奴に興味はない」

さすが優希さん男らしいぜ！

そんな訳で何とか納得してもらい教室から去ることができた。
勿論向かうのは自宅、ではなく部室だ。

―――――――――――――――――――――――――――――――

――

部室に入ると既に優希が来ており、隣には顧問の白菊先生もいる。
部屋の隅っこに寄せていた使い物にならない体育用具の前で俺達は集合した。

「早速行動に移そうと思う。まずは役割分担だ。一人は部の用具を買い出しに行く。もう一人はここの片付けだ」
「私もここで片づけをさせてもらうわ」

優希が本日の予定を告げる。
先生も手伝ってくれるようだ。
俺と優希の２人でいるのが発覚するとホームルーム前のようにいらぬ噂がたってしまうための配慮をしてくれたみたいだ。

先生の意見に納得した俺は、当然の如く力作業である用具の片付けを担当すると伝える。

「確かに最近はパソコンばかりやってますが、人並み程度の体力はありますよ」

なんたって俺は上でも下でもない『地味』な存在だからな。
昔は野球やってたし、腕力くらいなら人並みより自信あるぜ。

だが優希は頷かず先生もどこか哀れんでいるようにも見えた。

なんで？

不満に思うよりこの反応に首を傾げていると、有希は何か思いついたようで悪戯っぽい笑みを見せると昼休みに使用した机の前に向い

俺を呼ぶ。
指示に従い先生と共に近づくと有希は中腰になり片肘を机につける。
「龍青。ここは公平に腕相撲で決めるとしよう」
「有希も片付けをしたいのか？」
「どちらでもいい。ただ、体力がある方がやるという意見は賛成だ。
さっさと始めるぞ」

促す有希。
俺もそれで納得するならと勝負に応じた。
有希の手を組む。
やっぱ少女の手だ。柔らかく小さい手だ。
今思ったが女子とまともに手を握ったのって初めてだな。
もっと違うシチュエーションで手を握りたかったぜ。
勝負前に不純な考えをしていると不敵な笑みを有希と視線が合い思わず怯みそうになるが、少し手に力を入れ準備万端の意を見せる。

「確かに人並み以上の握力はありそうだ」
「嘘だと思ったのか？」
「・・・」

売り言葉に買い言葉。
有希の挑発に乗っただけなのだが、彼女は儚げな表情を見せた。

「さあ。準備はいい？」

怪訝に思っていると先生が手を組む俺達の上に軽く手を添える。

「一本勝負だ。手加減は無用だぞ」
「分かった」

既に有希は先程見せた表情はなく戦闘態勢に入っている。

「じゃあいくわよ。――始め！」

先生のかけ声と共に全力で勝ちにいく。

「龍青見なおしたぞ！」

「やっぱり男の子ね。宇江田君」

一瞬でついた勝負に俺はこんな感じで女性達の株を上げ、地味だ、地味だと言われた（実際は誰も言ってません）人生から脱出する。それが俺の脳内に描いた展開だった。

嘘だろう。いくら力を入れても動かねえ・・・

余裕顔でこちらを窺う有希が段々と銅像か何かに見えてきたよ。

「これ以上は可哀想だから終わらせてやろう」

――ダン！

俺の手の甲は机に叩きつけられた。

あまりの衝撃に手を摩り蹲る。

そんな俺に有希は胸ポケットから赤いバッジを取り出し決めポーズをとる。

「ふはは見たか。これがリーダーである私（レッド）の実力だ！」

うぜぇ。心底思った。

未だ痺れる手を摩りながら有希の腕を睨む。

「何でそんな力があるだよ」

制服で手首より少し深い所までしか見えないが、それだけでも俺の腕の方が太いと言える。
それだけの差は確実にあったのに。

「私は空手と合気道と柔道の有段者だぞ。力の使い方の一つ出来なきゃ始まらない」

彼女の説明だと純粋に腕力があるわけではないらしい。
力を十分に発揮させる技術を身につけているらしく、技術抜きの純粋な腕力勝負なら俺にも分があるそうだ。

「体力向上はヒーローの必要事項の一つだからな。部が機能し始めた時には教えてやろう。今日はこのメモに書いてある物を買ってこい」

なんか騙し打ちを喰らった感じだが、ここで反発すると後が怖い気がするので大人しく従うことにした。
俺の株、上がる所か下がる一方な気がしてきた・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2536z/

お前に英雄教えてやる

2011年12月11日13時52分発行